

「リベラルアーツ教育を通じて涵養」の意味深さ



「Society 5.0 人材育成分科会」の会長を一橋大学の蓼沼学長とともに務めさせていただくこととなり、私を感じた最大の課題は、多様な大学・企業の委員の皆さんと「Society 5.0時代の人材と能力」をどのように共通認識として合意するかであった。そのための手段として図で構造的に表現し議論を進め改版を重ねた結果が、「Society 5.0時代に求められる人材および能力」の図表(本誌14頁図表1参照)とリベラルアーツ教育についての定義(本誌16頁図表2参照)である。

この議論のなかで特に印象深かったのが、リベラルアーツの定義を図中に言葉として入れようとした際の蓼沼学長とのやりとりだ。「リベラルアーツの定義はさまざまな見解があり一義的

に定義するのは難しいから図のなかに入れるべきではない」という蓼沼学長と、「リベラルアーツを大学教育に期待する」という経団連幹部の意見を図に表現しないわけにはいかないわれわれの立場との対立があった。私からの提案は、蓼沼学長が文章で記述された内容を私が要旨として抽出して図に入れる案だった。蓼沼学長の回答は「文章すべてを述べないと正しく伝えられない。一部分のみ取り出されると誤解を招く」として、詳細に記述された別紙を新たに作成され、この分科会における共通認識の前提で大学側の合意をとっていただいたのだ。本文に残った「リベラルアーツ教育を通じて涵養」の意味はとても深い。

妥協で物事を進めることに慣れてし

まっているわれわれ実務家と、科学を生業とされ厳密性が重視されるアカデミアの違いを感じるとともに、蓼沼学長をはじめとするアカデミアの知性がなければこのように論理的な合意をとることはできなかったという過程を報告しておきたい。

合意後の分科会は、委員の皆さんの協力に支えられ順調に進み報告書に結実した。今後も産学の対話を継続することでSociety 5.0人材の育成には希望が持てる。一方、専門分野に閉じて学び、すでに大学を卒業し企業の主力となっている人材がいる。そのような人たちが教養としてのリベラルアーツを身に付けるための、リカレント教育に対する企業側の理解と行動が喫緊の課題だ。